
天国のバー

cokoly

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国のバー

【著者名】

c o k o l y

【コード】

N2851F

【あらすじ】

とあるバーで酒を飲み交わす男女と、それを観察するバーテン。
男の悩みは解消されるのか。。。。

「ここは天国や」

男は、ぱつりと、そう言った。

特に誰かに言つて聞かせようとした言葉ではなかつたようだ。その証拠に、男の周りには連れが見あたらない。一人でコニャックのグラスを傾けている。そして終始うつむき加減の姿勢を崩さない。

「なあ、そつだろ?」

第三者から見れば、彼はグラスに向かつて語りかけているように見える。

バーテンは、いつもなら声を掛けていたところだったが、どうしようか迷つっていた。

何となく、今は声を掛けない方が良いような気がしたのだ。これは、長年、経験を積んできたバーテンとしての勘によるものだ。幸いなことに、男の言葉はつぶやきのレベルで周りに聞こえている様子もなく、他の客に迷惑にならなければ自由にさせておいても構わないだろう。悩みを抱えて一人で酒を飲みたい客だつている。

すると、隣の空席がいつまで経つても埋まらず、その空疎感に業を煮やしたらしい一人の女性客がやって來た。彼女は不安定な手つきでカクテルグラスをふらふらと宙に漂わせながら、カウンターの周辺をなめるように通過しながら男の隣にたどり着いた。目が完全に据わつていて、一目で泥酔しているのが分かる。

「ちよつとあんた、何一人でぶつくさやつてんのよ」

女はそう言うなりグラスを持たない方の手を腕ごと男の肩にまとわりつけてきた。物腰の一つ一つに有り余るほどの扇情的な動作が散りばめられていて、好戦的なまでだ。戦うという手段のためには目標や標的を選ばない、と言つ空気が感じられる。

男はちらりと女に目をやつて、

「君はどう思つ?」

と聞いて、再び視線をグラスに向けた。男はあくまで冷静だった。
「何の話? あ、待つて。小難しい話は無し。そんな気分じゃない
の」

女は男の肩に巻き付けていた腕をほどき、その指先を横からむり
やり男の唇に当てた。巨大な胸を張り、艶めかしい微笑みを浮かべ
る。もう片方の手は、グラスを空中でふらふらとさせたまま。

「色っぽい話にして」

女はそう言うと男の顔をゆっくりと自分に向けさせ、その手を自
分の口元に運び、さつき男の唇を塞いだ指先をちらりと舌先でなめ
回した。

男は自嘲的な色合いの強い小さなため息を、鼻でならした。

「ここは天国だろ?」

「残念ながら違うわ。でも道は知ってるから。あたしが天国まで案
内してあげる」

「すまない。今日はあんまり気分が乗らないんだ。いつもなら…
いや、別にいい」

「なあに? 嫌なことでもあったの?」

「いや、俺はいいんだ。俺のことはすごぶる順調だと言つていい。
ただ、周りに色々と悩みを抱えてるやつが多くてね。そういうことを
色々と考えてたんだ」

「なにそれ。他人の悩みが悩みの種で、悩んでるうちにあんたが悩
み始めて余計に悩み深くなつたつてこと? ん? 合つてる? 今

の」

「だいたい合つてる」

女はさつき舐めた指先を男の頬に軽く突き刺してぐりぐりとこね
回していた。

「もう、そんなの忘れちゃいましょうよお」

「そうしたいんだがね。なかなかそうはいかなくて」

「わかった。あんた、カウンセラーか何かでしょ？人の悩みを聞き過ぎて食傷気味になっちゃったんだわ。きっと」

男は『おや』と言う顔をした。

「よくわかったな。その通りだ」

「ほんとに！？ わあ、当たっちゃった！ ねえねえ、私の悩み、ただで聞いてくれない？ あんたたち、聞き上手なんでしょう？」

バーテンは、一度カウンターの奥の厨房に姿を消して、しばらくしてから戻ってきた。

「Mさん、お電話が来てるんですけど、お繋ぎしますか？」

男は何かが顔に当たったのだけれど、何が当たったのか全く分からぬ、と言う顔をして、

「俺に電話？」

「ええ。すみませんが、コードレスフォンではないので、奥でどうぞ」

M氏は何となく合点がいかないような顔をしつつも、バーテンの言葉に従つた。

バーテンは店の奥にM氏を連れて行き、

「すみません。電話は嘘です。少々、『こ気分が優れない』ように見受けられましたので。あの女性は退屈が我慢できない方ですから、もうしばらく待つていれば、河岸を変えてくれますよ。それとも、余計な気配りとなってしまったでしょうか？」

「いやいや。そんなことだつたとは。ありがとう。正直、助かつたよ」

バーテンは、人の良い笑顔を浮かべて、

「では、こんな所では何ですので、こちらへ」と言つて、厨房の奥の扉を開いた。

そこには小さなブランダがあつて、控えめな大きさの丸テーブルとティキチエアが二つ、テーブルの両脇に置かれていた。そこはバーが気晴らしに寛ぐための場所だという。

「地味ですが、この世の天国と言えなくもないですよ」

ベルランダからは都市の夜景が一望できた。さすがにビルの裏側なので百万ドルの夜景、とはいかないものの、それは十分に美しい光景だった。

「す」「いね。悩みを忘れそうだ」

男は思わずそう言った。

「常連さん専用です。ただ、予約は出来ませんので、そこは」「勘弁を。頃合いを見計らつてまた声を掛けます。それまで」「ゆっくりどうぞ。まあ、今日はMさんの貸し切りでもいいですけれど」

「なんだか逆に、すまないね」

「いえいえ、とんでもない。ぜひまたお越しいただければ幸いです」「来るよ、もちろん。むしろ回数が増えそうだ」

バーテンがカウンターに戻ると、さつきの女がグラスを空にして待っていた。

「どう? うまくいった?」

「完璧。これであの人も店に足を運ぶ回数が増えるだら」「でも、来る度にまたベルランダ使わせろって言つんじゃない?」

「その時は先に使っている人がいるって言つた。あの夜景は、本来僕だけのものだからね」

「ふうん」

「また頼むよ。ありがとさん」

「いいのよ。あたしはタダ酒が飲めれば、お芝居してのもおもしろいしね」

「そりやよかつた」

「でもたまには、あたしにもあのベルランダ使わせてよ。色っぽいサービスしてあげてもいいわよ」

バーテンは、ちらりと女の顔色を見た。

「そうだな。こんど店が暇なときにでも」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2851f/>

天国のバー

2010年10月8日15時04分発行